令和8年度宮城県交通安全ポスター作文コンクール入賞作品 【作文の部】

中学生の部

＊作品は原文のまま掲載しています。

宮城県知事賞

「少しくらい」が事故を呼ぶ

岩沼市立岩沼中学校　三年　水戸心菜

私は、最近交通安全について興味を持つようになりました。その理由は、ニュースで「青切符」の制度を知ったからです。

青切符とは、自転車などで交通違反をした際に切られるもので、いわゆる違反の通知のようなものです。また、十六歳以上の運転者には反則金の納付が求められます。細かく分けると数百種類以上もありますが、主なものとして、信号無視、イヤホンをつけながらの運転、二人乗りなどが挙げられます。

私はこのニュースを見て「自転車だから大丈夫」という考えではいけないと改めて思いました。

私は普段、学校への登下校や、どこかに出かけるときに自転車を利用しています。今までは急いでいるときは、信号が変わりそうでも進んでしまったり、一時停止しなければいけないところを止まらずに進んでしまったりしていました。

しかし、ある日、自分がとても危険な行動をしていたことを実感する出来事があったのです。

その日は、自転車で友人の家に行こうとしていました。その途中、スマホから電話が鳴り、一瞬くらいなら大丈夫だと思い、電話に出たのですが、そのせいで、いつも確認して通る道を確認せずに進もうとしてしまったのです。すると横から車が飛び出してきて、衝突しそうになりました。幸い事故にはなりませんでしたが、もう少しタイミングがずれていたら、重大な事故になっていたかもしれません。しかし、振り返ると、車が飛び出したのではなく、自分自身が飛び出したのだと思いました。私はそのとき、車が止まってくれるだろうという自分の軽い気持ちが、とても危険であったことに気づき、交通ルールを見直すきっかけになりました。

また、私以外にも、最近スマホを見ながら自転車に乗っている人をよく見かけます。友達からのメッセージが気になったり、音楽を聴きながら運転したくなったりする気持ちも分かります。

しかし、前をしっかり見ていなければ、人や車にぶつかる危険性が高まります。実際には小さな事故であっても、自分が怪我をしたり、相手に迷惑をかけたりすることあるので、自転車だから大丈夫だという考えは良くありません。自転車は車両と一緒のルールになるので、小さな事故でもとても怖いことだと思っています。

この経験を通して、交通ルールは、ただ厳しくするためにあるのではなく、自分や周りの人の命を守るためにあるのだと改めて実感しました。

これからは、どんな時でも交通ルールは守るものという意識をもち、私自身もこれまで以上に交通ルールを意識しながら、安全に自転車を利用していきたいと思います。

宮城県警察本部長賞

交通安全第一に

石巻市立石巻中学校　一年　阿部翔生

僕はこの夏休みに、新しい自転車を買ってもらいました。今までも自転車には乗っていましたが、新しい自転車を買ってもらったことで、自転車に乗る機会がもっと増えました。

そんな中、僕は自転車の交通ルールについて考えるようになりました。今年の四月から、自転車の交通ルールが変わり、十六歳以上の人を対象に、交通違反をすると「青切符」が適用されるようになりました。自転車にも車のような制度が取り入れられたことを知り、僕は少し驚きました。

僕は今まで、自転車は自動車よりも小さいし、免許も必要ないので、交通ルールについてもそれほど厳しく考えてはいませんでした。しかし、自転車も道路交通法では「車のなかま」とされていることが分かりました。信号を守ることや、道路の左側を走ること、一時停止をすることなど、自転車にも守らなければならないルールがあります。

例えば、急いでいるときに赤信号でも「車が来ていないから大丈夫」と思って渡ってしまったり、友達と話しながら周りをよく見ずに走ったりすると、とても危険です。僕も車に乗っているときに、自転車で走っている人が急に歩道から車道に移動したり、脇道から出てきたりして、びっくりした経験があります。自転車を運転している人には飛び出したという意識がなくても、車を運転している人にとっては、自転車に乗っている人が次にどんな動きをするのか分からないので、とても危ないことだと思いました。事故を起こしてしまってから、「ルールを守ればよかった」と思っても遅いのだと思います。

また、僕は自転車に乗るときには、ヘルメットをかぶることも大切だと思います。すぐそこまでだから大丈夫と思ってしまうこともあるかもしれませんが、事故はいつ起こるか分かりません。「すぐそこまで」という油断から、事故は起きてしまうと思います。ヘルメットをかぶっていれば、事故にあったときの頭への被害を少なくできる可能性があります。自転車に乗るときには、絶対に必要なものだと思います。

今回、新しい自転車を買ってもらったことで、僕は自転車に乗る楽しさを改めて感じました。でも、自転車は便利で楽しい乗り物だからこそ、安全に乗る責任があることにも気づきました。

交通ルールは、罰を受けないためだけに守るものではなく、自分の命や周りの人の命を守るためにあるものだと思いました。新しい制度が始まったことをきっかけに、僕も今まで以上に交通ルールを守り、周りをよく見て、安全な運転を心がけたいです。そして、自分だけではなく、歩行者や自動車に乗っている人のことも考えられる、自転車の乗り方をしていきたいと思います。

中学生の部

＊作品は原文のまま掲載しています。

宮城県教育委員会教育長賞

「お守り」

石巻市立石巻中学校 二年 阿部善多

私が自転車に乗るとき、必ずヘルメットをかぶるようになったのは、あるはっきりとしたきっかけがあります。

数ケ月前、私は家族と一緒にリビングで夕方のニュースを見ていました。そこで流れてきたのは、私と同じぐらいの中学生が自転車で転倒し、頭を強く打って病院に運ばれたというニュースでした。画面に映し出された、歩道にポツンと残されたスクールカバンや、ぐにゃりと曲がってしまった自転車の映像を見て、私は胸がしめつけられるようなショックを受けました。

それまでの私は、ヘルメットに対してあまり良いイメージを持っていませんでした。「かぶると格好悪いしダサいな」や、「近所の友達の家に行くだけなのに、いちいちかぶるのは面倒くさい」とばかり思っていたのです。なので自転車に乗るときは、いつもヘルメットを持たずに外へ飛び出していました。

しかし、ニュースの中でアナウンサーが言った言葉が、私の心に刺さりました。自転車事故で亡くなった人の約七割が頭に強いダメージを受けており、ヘルメットをかぶっていない時の死亡率は、かぶっている時に比べて約二倍以上も高くなるという内容でした。この数字を聞いた瞬間、背中がゾッとしました。「面倒くさい」「ダサい」「格好悪い」などという軽い気持ちのせいで、私は毎回、自分の命をとても危険な目に遭わせていたのだと気がついたのです。

ニュースを見てから、私は行動を改めました。友達の家に遊びに行くときも、どんな近い場所でも必ずヘルメットを頭にかぶって、自転車に乗るようにしました。

しかし、毎回ヘルメットをかぶって走っているうちに、こう思うようになりました。ヘルメットを頭に乗せているだけで、なんだか守られているような、強い安心感があるのです。その安心感は、私の運転の仕方にもいい影響を与えてくれました。前までは、「早く行きたい」と焦ってスピードを出していましたが、ヘルメットをかぶるようになってからは、「せっかく安全対策をしているのだから、運転も丁寧にしよう」と思えるようになりました。

中学生になってから、小学生の頃よりも自転車で行ける場所がぐんと広がりました。それはとても楽しいことですが、同時に、自分自身の責任で命を守らなければならないということでもあります。

ヘルメットをかぶることは、恥ずかしいことかもしれないが、自分の命を守るためにとても大事なことです。これからも私はヘルメットという頼もしい「お守り」と一緒に、安全に自転車に乗り続けたいです。

一般社団法人 宮城県交通安全協会長賞

交通マナーに目を向けて

仙台市立南中山中学校 三年 石立夢葉

「ピーポーピーポー」

サイレンの音が鳴り響く。私たちの車は、徐行して左側に止まった。後ろから救急車が通り過ぎていく。前を見ると、なかなか止まらない車がいた。それを見て私は、家族が救急車で運ばれたことを思い出した。

私の家族は、何回か救急車に運ばれたことがある。そのときは、車がゆずってくれてありがたかったと母は話していた。もし、ゆずらない車がいたとしたら…想像するだけでもゾッとする。この話を聞いたとき、車を運転しない私たちにも関係することに気がついた。歩行者信号が青になったら横断歩道をわたることは当たり前だ。だが、救急車のような緊急自動車は信号が赤でも青でも走ってくる。このようなときどちらが優先されるのか。調べてみると、法律上、歩行者が緊急自動車をゆずる義務はないことが分かった。だが、あと一歩で助かった人が、歩行者がわたるのを待っていたために助からなくなってしまったら…そう思うと、たとえ義務でなくてもゆずった方が絶対に良いと思う。

今まで車と車がぶつかる事故や、車と人がぶつかる直接的な事故で命をおとしてしまうことに目を向けてきたが、緊急車両を誰かがゆずらないことで、あと一歩のところで命をおとしてしまう人もいることに気がついた。そして同時に、今まで他人事だと思っていた事故が、一気に自分事のように感じてきた。法律で決められている、赤信号は止まる、青信号は進むなどの交通ルールを守ることも大事だが、交通マナーやモラルも同じくらい大事だと思う。交通マナーは、緊急車両をゆずるという命に関わるものもある。また、信号がない横断歩道をわたるときは、当たり前のようにわたるのではなく、止まってくれた車に一礼をすればどちらも良い気持ちになると思う。これは大人になって車を運転するようになっても同じだ。歩行者に道をゆずるときに手で合図したり、車同士で相手がゆずってくれたときは相手に一礼して感謝の気持ちを伝える。このような相手を思いやる交通マナーが、私は大事だと思う。

私は以前まで、そこまで交通マナーは意識していなかった。だが、自分のマナーしだいで助かる命が助からなくなることもある。私はこれから、そのことを意識して他人事ではなく自分事だと思って過ごしていきたい。そしてもし、大人になったときに車を運転するようになったら、相手を思いやれる人になりたい。

中学生の部

＊作品は原文のまま掲載しています。

宮城県ＰＴＡ連合会長賞

「かもしれない」意識することが大切だ！

塩竈市立第一中学校　一年　石川　凛

歩行者も、車も、「かもしれない」を意識することが交通安全に関して最も大切なことだと私は思います。車は、歩行者が飛び出してくるかもしれない。私たち歩行者は車が突っ込んでくるかもしれない。と。

私が小学校のときの通学路で、印象に残っている場所・出来事があります。その場所は坂道の途中にある横断歩道で、車がよく行き来していて、その近くにある駐車場も、車がよく出入りしている場所です。

ある日の通学中、私は手を挙げて、その横断歩道を渡ろうとしていました。そのとき車の音はきこえず、車の姿もみえませんでした。けれどここはよく、相当なスピードで走ってくる車がいるので、今日も「くるかもしれない」と思い、再度左右を確認しました。それでも車の音や姿がみえなかったので警戒しつつ一歩踏み出したとき、案の定、相当なスピードで走ってきた車にぶつかりそうになりました。「かもしれない」と予想はしていましたが、さすがに驚きました。

横断歩道を渡ったあと、私は二つ考えました。一つ、このタイミングで、自分より遥に年下の低学年の子たちが渡っていたら…。二つ、もしこのとき私が「かもしれない」を意識せずに渡っていたら…。

まずは一つ目の予想をしました。低学年の落ち着きがなく、いつもここの横断歩道で、左右を確認もせず、すぐに飛び出して、走って渡ってしまう子たちです。その子たちが、あの車がきたタイミングで飛び出してしまっていたら、ぶつかっていたか、ギリギリで避けれたかの二拓だったでしょう。

次に、二つ目の予想をしました。車が見えない・きこえないからと、すぐに渡っていたら、先ほどと同じ結果になっていたでしょう。

一つ目も二つ目も、結果がどうとあれ、危険だった。それに、「かもしれない」の判断をしても危なかった。

ということは、私たち歩行者だけが「かもしれない」を意識しても、交通事故を防げるわけではないのです。車を運転する大人の人たちも「かもしれない」を意識することが大切なのです。

もちろん、車を運転する人だけが意識しても意味がありません。歩行者も、運転手も、一人一人が意識することが最も大切なのです。

なにかあってからでは遅い。一人が取り組んでも無駄。みんなで取り組むことが大切。なのでみなさんも、「かもしれない」を意識しながら行動してみましょう！その行動一つで、一人一つしかない、小さくて人生において最も大切な『命』を救えるかもしれません。

作文の部　応募作品数

小学校１～３年生の部	３０作品
小学校４～６年生の部	５６作品
中学校の部	３８作品
合　　計	１２４作品